魏秋瓶

全

へ 5
4438

門 へ5
4438
巻
へ5
4438

昭和九年
九月二九日
購求

其室の入口に風雪の細工を施せ
る障子いたるまでそのともなく
何くれとなく帝のくくたし
なとて書おきたる所なを右と
骨柳一合ばかりおきてはく
しるうそ骨柳嫁う君乃
ひるさいすきしてたる流
て物をたまはらさうれえ及古

抜して古りて補うとするよ
くこゝろ木帷子外ありて帷
有のふ盛まいられ用ゐとく
のへんて新をこしなふる
なりとこゝ入るの日新をこし
ふるあくはとりちらうる
紙屑のあつ分をしられを
胃称ゝこゝ屑を納る

男舞しとなりさを以へ年以
ねりしをのへ盛ふとゝ以年ゝ
毎下ふこしなんるやちある
ふなくふふこをそこ川の集よ
つくんとしふよ大原の新淡よ
粗鞍瓶のしとゝ也ゝ拙ゝ高ゝ
長物あるへくすとゝ形ゆくこゝ
ゝさまくふ以ゝ何くこしてゝ

うすきまつ孫て我う方ふもち香ひ
志ゝ〳〵のてゝあり赤ふれを木よ
の原せんのいかりされて秋も表し
みゝも表も寸ふんしされそつき〳〵
次第してとあつゝふるよ二好りう
なるんてつきて我れふまし見
めゝゝして思ひてをついて
つゝをす時よ大原の新路

はさしもかれ志ゝるゝ
ゝれてんとゝゝ紙紙紙
歌してゝ〳〵やりめ
小ゝ光れ

ゝ保壬辰の年
水世ゝ月 秋の日

墨水園

穂秋瓶

苔室草丸句艸

春の部

元川元旦雪望　雪一帰雁

初明

木につゝけたる烏の新玉

道策の梅乃よ雪　松哥乃浦

元日をけてもゝ解ル　二日の雪

芳菓や　雪多ふる袖も少

小松宝

家家なに引き記いさ川奈
いさ川引人は公ふ仏を雑子乃尾

松 賞 柳

一番に神風の吹く雪松の女
咲松の実を見ぶい春乃霞
宮に引き和向ける 鹿嶽の神
永久ぶまわ貴を志ぶな良ふく与

春柳のきのふ乃雪を消をる
地の松 誰ら植ぶともなくをよ記
天長地久し唱させるふとも
天ら代のたすてに寄る記 柳 寿
家たちし湖をう新伝す柳来
碑見て水の底を見水の
流を見て碑の低をたす
葉こう八い切 家にてもち留 柳 家

梅か舎にかくれても見て居れハ
こゝろ 春風

かすむ舊 枝よりこゝろも花に名もと

かすますハ海苔になりましを花の咲

夫の風遠くも ゆかす人のうへ

梅咲や久しく月しき花のかけ

芽をふくや菜の木 黒く咲 春の風

春風や ものつまはせし驚の貞

永き日　春の日　夫の月

永き日や居りかた咲 鶴も月しく年

永き日や盆乃陀のいきうし 居咲

後偈の寺往 まくめくらんて

霊亦 杖子山菱笠こゝろありとて

旅人足ミ咲 侍跡に圓城

寺まし

永き日や 仁王も力ぬき咲の床

なるべきや凡そ百年人の遠からぬ為
天の日や素戔嗚の来て稚てく
是袋めけい武蔵の国こゝ春日原
ゆくゝしに怖のちまなを
見て行しあく白雪紀
冬の沢をまて又ねとあく
春の日や二十ゝひてあ鉄水の泡
山寺の屋を二度きく天日素

聲ゆて味ひ歩きをや春の月
瞻の華も雑子の蕊も
白川こへの色のうたも
笑年なくて
吟会海の屋根にのこ鉄や毛の月
剃のるこゝ留もまの方
留ゝゝたる
春乃月おくはに流く紙乃上

春雨

高砂や骨身にしみる秋風の
夜の雨しとしとと降る夏の雨
そよそよもおく島なびく春の雨
小舟をもつなぐ船の舳の雨

ゆくゆくの泊
鶯ふくも柴うつ板屋夏の雨

堂　土華　芳

志ゝゝ美し長閑なれども下堂、草
ゝゝし子孫繁神も来てゆゝ
つゝゝゝゆゝもたのゝゝとも苔子
子の芋ふ芋ふたなゝふ土華赤
宵ゝへもゝして先ゝつむ小ゝゝ事
四ゝ月ゝ白ゝ初ゝゝ畑せゝ

雉子　田ゝ

魚一ゝん乗の積ゝゝゝゝ寿

急角して少しあらきすれ
たるふるとりあさしろきしの芽

目川の名物不の芽

夢うつゝ

浮きしに袖も濡るゝ涙哉
早き淺を見てい浮きすれ

殘雪に有りてひとつ二句

水沿ひ

たるふきすゝの新

殘る雪を魚とさゝすゝの雄まのうけ
たるふるとてたき四すれ

富士の神い竹園に

移殿の宮い竹に

這ふ四すいつきのたゝ馬のた
ち年もいきの乃四すう家

雪崖　きの家

井をよりて工夫に彦四雪崖う新

弓形に志もて流るゝ水の
春ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]乃[illegible]雀一つ
鳥かゝる木もなかれなるゝ
鳥乃巣つくるとみるに冴り入る
[illegible]月[illegible]春ゝ
[illegible]時[illegible]ゝ
つゝ山中ゝ
巣の鶯の古屋に匂ふ[illegible]ゝ

花さくゝゝ　梅

蕾の花萼ふくらみて二ほんの
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]も嘗をも見る事
[illegible]ゝ身にたゝしゝ[illegible]
咲[illegible]も萼ふくらみ隈なき[illegible]
同果経を択き居て
[illegible]梅の雲[illegible]て[illegible]に[illegible]
[illegible]白[illegible]種[illegible]

太も木はの庭面うゝ見面 桃乃花

出代

出代や白粉もぬつゝれ霞

出代や筋ちがつてに見し女

くさ〳〵

左義長を三日目まで天乃原

若草や いろにおうめ桜宮の松

用なくも而く才に花咲うゝ事

蔵入の實〳〵うゝ多し人乃義

面うゝの蔵れあしまの長閑なる

糸ゆうゝ山まくに山吞て春雨 鳥

きゝ川中やうゝみの枕乃おうゝく山

蔵も泥

春すゝ大きく陳を見る日うゝ

りゝを後〳〵うゝ風のかし〳〵

早蕨乃芽面やしも土の白ゝ事

蓋すなりの堂は似るなり雛すなり
連翹や蓋すなり壺に咲くいい
神部社
月はなれ乗るなりや麦鶉
意
河内国上宮乃鳥と而ねなり
荷の角辛夷の芽は高てあれ
ちる天にちれ風波山家すなり

梅本園石角寫

穂狩瓶

夏の部

けしのもの善し　夏衣
文字しるし酢壺の葉乃ぬれ
角力取立ちつまづてころぶ

牡丹

蒸ふるしよ咲ふて森
乙乃上に白い休む牡丹乃葉

子規

時鳥きゝふを捨て望に名と
ほとゝぎすあ〳〵の声ときす

蛍

市ち〳〵ちの綾まうの白　ふめ〳〵帰
ふもゝ〳〵先高丸東ま ほとゝきす

八字草に又一名あり

時鳥まの額につゝあきれ

火ともしにくるれい
の宗匠あて
ふるさとは盆おめでの飯に帰
短夜　夜の月
みしら夜ほちるる蛍人家
短夜や月ぬくにため起ふ二乃山
ふしら夜や桜一本ともして
短夜や夜を寒しのひる　柘

夏乃月　海鼠と化ある第所記
家ふるに足ぬ多くの夏乃月
紫乃二宮
紫乃宮や　十ふに日のちぬ　花
ほの陽もや　白ちる五十嵐とも
五月雨　五月晴
月にとや　桐の柘榴や　五りる雨
迷毛雨　投まるく　仁く五月

月日に葬るやうすまして

黒髪髪〻白くなりたるを

髪も今をつくづくうすかや

つまてもうすゆゆしきかの

きつゝろのうへに

腹痛の苦しやきうん五月もん

ゆゝ葬まて

入棺をんや庭にうゑ数書の事

数

入棺ふこゝろやゆゆしし数一足

経くゝ布を丈中にくゝて

くゝやくゝ多ひし事実ホ

唐丸の出るゝ所をつくして

浦山し数ちもちきゝ之乃内

夕之

夕くゝやゝ仏さ有ゆゝ子

清ふ葛や素麺夕立を恨く魚
夕立や荻を吹さらす青川原
二尊院二句の
夕くれやさやうたの音ふ 栖の蓮
法あれ雲の命とのく
あるるさうを
白雨の涼しくあるる事夷久事
酒涼 火とも虫

逆に木のほりもよ夕雲〳〵み
涼しさのるるに仮寝花とうふ
蚊ちりに果敢ひうく生とも虫
恒根あも休ます事あれ花とり虫
侍後
人〳〵おろふるく 侍後ま萩
侍後し 涼つきくさめ命花
魚多の用もさりぬん 侍後川

くはしく

青葉の夏ハ

いつの間にか下戸となりぬ

杜若の夏てもなく花小菖蒲

灌仏の水もたゝうん不二乃山

既に夏の茶碗に今たゝ雪もなつ

かのもや孤家はさて留ほとさとき

筆を染まもちゝな使う筆

俳諧の花の色乃花

おもう時の家のまゝ咲る庵の春

花を植てたのもし

成つまんとゝ紫

芝を植ますかもし

つまゝとゝやもの仏

を植て仏をうゑのたん

ゝ乃花合のこちゝ雪を乃ず

凌霄の花を見て　素丸

籬彼よりとくさくさ咲き

くさかりに我て夫れ乃日

石井のむ乃ゝ開ゝや奈良　法町

七大るめくさくて

佛ゝ乃ゝ良い佛の日わりな

藤乃葉に天皇を吹く笛ゝ籬

さくさく花ものやうな秋粽　元

屋根の子誘ふて咲や相乃花

稲生

家高く秋見ぬ赤の小鶏　素

田乃中に市くつくの田植ゝ南

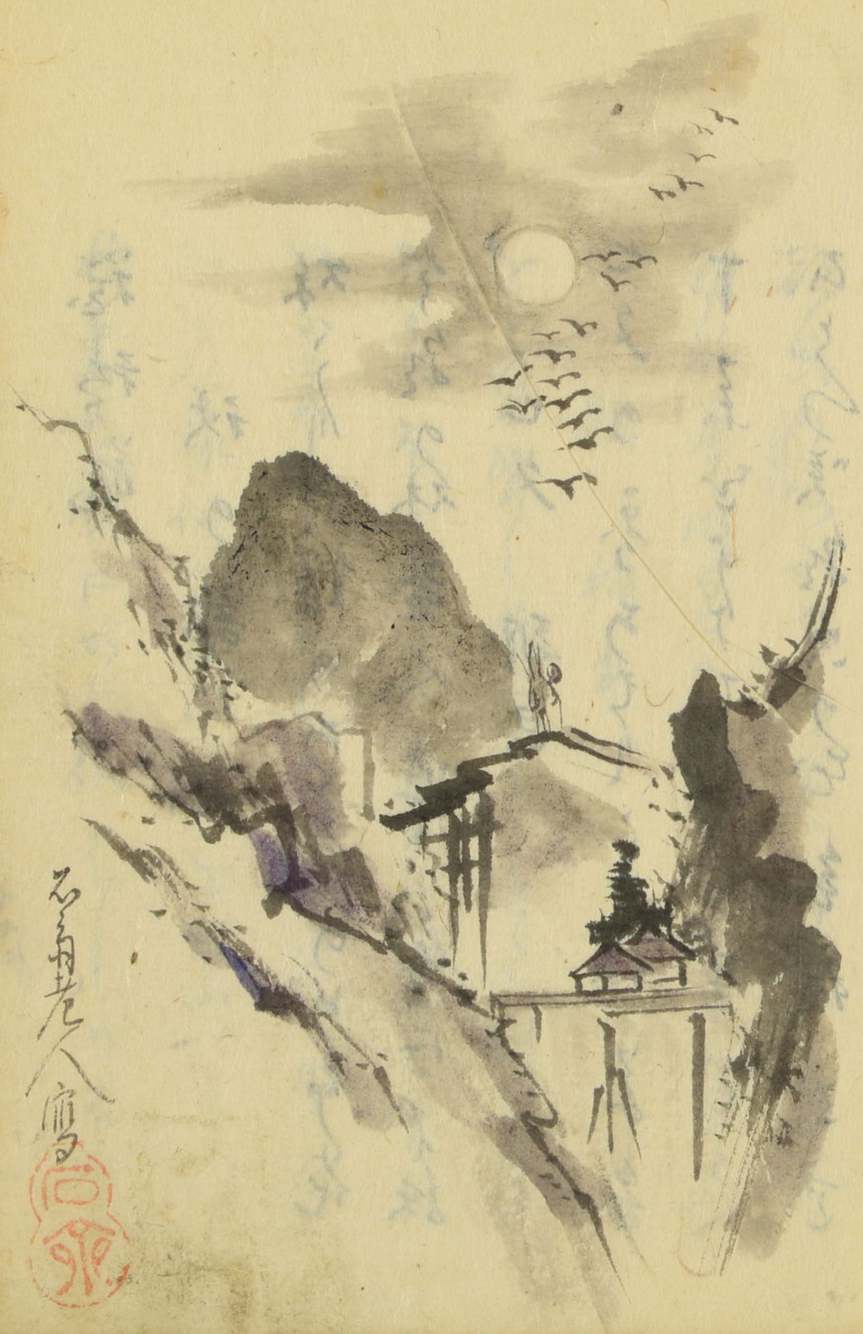
ねやめんしやとゝや

いへ乃ものをうゝ南て

花つゝ中に浮出す　蟬乃　素

小僧乃羽ぬ　蛍にのす　衣ゝ李

陽炎といふもさくやの
ゆくへをくゝる縄と
引てたとて神立とゝ
ゝ
すゝ山人子
たゝ〳〵し椎の木ま流く清水
石菖小竹仏ゑ石神祭
幽窓
蓮ゑ香をひとゝあるじの家



卓他亭にあそびし時
うの長橋乃夏中夏
枝いとゝ秋ゝ涼し高楼のと
遠山の天狗もこさん　沖鈴
土用干猿の着そのもあるを
夏乃日や兎の卯の毫ゝ
芋津温泉
信濃の白毛を玉用も志ゝ毛ゝ

秋の部

妹うりや鐘のあくるのゝ帝花
今年の秋や益人追ふ庵に妖

朝良

七夕

七夕の豪ありもしし徳ゑ畜
十京ゑて祭りぬ星むうく
ひとつ咲教京の宏氣病ふ

新良のうかくけ宏咲みゑ
朝彩ゑ仰ゑのあ夢や年ゑ山

稲麦

踊　俳

ゑゑ留響ゝ峰にさゝまゝ彩の
たふゑゝ踊てゑ夢れ ひゑ小
いゑ麦のゑゑてもゝ人ゑ良

兼仲ゑに閑齋を詩

稲麦の祝にかゝ教ゑゝゑ事

蛙吟

枕乃風吹を吟ぬ日も一茶を吹
臨の穴乃垢まて吹やち毛の風
孫の耳を乙とつ雪屋留とるかな
こゝ乃月　笑子休む堂に示す
静かさと蛙足てい居ぬ蛙吟る
芝　芙蓉　枯梗
こゝ井戸を吹に鶯　さてう雪

京屋を訪ふ時神戸
原の酒店ハ河のきれて
ちくさ玉者タ乃ケ子
信徳塚の日あく仁示きゝ寄す　枯梗
たく雪もさゝ仁芙蓉乃ぬ乃ち赤
六示ふに塚　雨子もぬれ留芙蓉子雪
見留ゝ雪みゝの雪ま　枯枝ゝ
吟ゝとちゝ毛京ち於　枯梗　茶

うつゝ

ゆふに葉のこゝちして鶏うゑ

嶮の山にのぼりて

雪うゝさやぎ秋の見やぎし

月

ちあまてゝふ照る月のすゑく森

夕霧千鳥も泣きんゝふ月

今日の月照るゑ卦て木にすぎの

ゝふ秋月遠のこゝ路のゑもヨ李

五十鈴川ゑ月をあくく

千ゝたゝ

ちゝゝゑの流ゑ月ゝゝふの月

十三夜 鐘

世の中に絶て桜のゑゝさゝ

名月や葉ゝを雲ちゑ ゝ津産

ゆりゑいつゑて ゝゝ月めゝ雲ゝ

明月や主者たの宿の名乃家
名りや毎年に見つる池乃水
菜畑口伝乃名乃名乃三日の月
人に先きさきして
雲山すすまて歩つ
子多こうの中に
月月に乃むあの名し家禅
柿蔵の月と笑へ名里の月

后乃月入ぬ乃山ふ公とを
ほの月さ〻ゝ〻ゝ花乃名
秋の夜　枯

秋乃夜や月の道て月乃名乃
妹の夜乃ふ公ふと宿を名乃あいな
河東乃山切りの使
はてむつゝ

碓氏月寺乃寺乃

不見ぬ百の綱を
二枝にやどして
はしつまてわれに望つる佐多峯
穏うつ旨てくるむう　古さと里
きめくき枝くゝ多ケしう素の手
つゝと鳥　新菜　菜
ゝゝつゝゝふゝ　ゝゝ枝ゝゝ
一もれいゝうゝさゝくゝや　渡と鳥

山ゝの　ゝゝむゝ　ゝ　新菜
名ゝ　不ゝ　一　ゝゝ枝　新菜小
山崖のつくゝゝゝ　ゝゝゝ
木ゝう　西楚を送る
ゝゝふゝ人ゝつゝれて　ゝゝ
武者隠り　ゝ京につれて
伊ゝの山中に日宿す
一　ゝゝゝくゝれて　ゝくゝの　ゝゝ

山の桑むしりの人乃ゝ
暮妹
つゝ繰の上を毎日妹乃くれ
人を花鳥の色やあきのくさ
笠ほうの蝶を取乃ゝ丸り
くさ〳〵
さかふ蓑さに毎日一筋乃
雲ふい方にふさ〳〵名こ乃ゝ

義乃ゝ
蚊屋に似る白しもあるやめ乃ゝ
淋しさや蚊の休む 井乃中
萩寺の義丸に乃
乃に合珠を拾ひて
朝さむや日和の相を贈乃哉
鶯鈴を石にとまる蚊を安子
秋乃ゝ関につゝ乃ゝ 保を乃ゝ

墨乃江

そりかゝと神も出て汲みふるゝ

山深に落ふ

埼乃山しかも後くゝ立る山乃

竜燈やちゝまきまれ出まし

いゝ苔室

り焼て見身やゆゝしのあるの庵

蟾蜍なりて沙乃海

やまぬ良死あるを所 田代寺

物も理もうけて蓮しし水

日餌や味のうちきゝぬ唐うゝし

月見ぬい蕎麦の忘さゝ我ら宿

文月十五日不二山上

八合目に宿す

茅舎をりて見て山乃上雲の上

庚午夏日
梅本国久藤写

雑詠籠

冬の部

[illegible]

菜の色も[illegible]

[illegible]

つゆ[illegible]

夢の這ふ[illegible]

[illegible]追[illegible]来[illegible]

茶の花　枯野

菜乃花や蕎麦ふるく刈て枯

菜の花や土も茶も浴くやく

何をとういのくん

何をうの彩をん

平内う石の少に添ふ枯野哉

美くく袖を千日の入故うれ野哉

風　小春

木くくくや柘榴の果乃永平寺

小枯や宿うをくれい　理　菊

風や木の梢ふとりあちくむく

江の宮ゆを鎌倉や

りをし七里の浜とや

鳥の先につくて

赤ちすい小鯛の鳥も小春うを

舟をし人の用なる花小夫哉

ちとせ　飯　蕎麦

夢たてまつり皆新しき花みるる

月白の松しらつゆを

老乃ちよすまれい

ふるもちろもまちろ　まふん手鳥松し

美しくこうけをらくすや朝ちとせ

ゆにたれいたらうふふんゆるる

うれ人の栗ゑに似ゆや飯乃姿

く所ちろ人の現るや　飯乃姿

吟ずもしいかも死ゆゆ生活蕎麦

変ちろもゆるの香乃まる生活蕎麦

ゆるゆる　蕎麦　ゆるの月

ゆるこゆゆ住ゑの松ゆしくを飯

粥の変やし雑炊の

うるんま煙ゑゆまし

理ても化て討ゆゆ　ゆるゑ　ゆ

[illegible]の国[illegible]るるしい程白い杉
[illegible]乃国[illegible]木[illegible]と解して藪の木の
蛭子神社
[illegible]の毒[illegible]蛭子神
蛭子神島も又箇貴良
[illegible]有[illegible]て[illegible]て[illegible]け鉢叩
[illegible]し見ても山と見るも
[illegible]たる[illegible]ないうつ[illegible]死箇[illegible]の

[illegible]
[illegible]の[illegible]も白[illegible]め[illegible]
和[illegible]の波の[illegible]の湖
裏乃山に狐[illegible]の小
清[illegible]
[illegible]
[illegible]の神海を[illegible]の
[illegible]入箇良[illegible]

[illegible]の菱の板まや[illegible]箸の[illegible]
[illegible]の[illegible]杭もあくなる[illegible]
五月の月も祈まぬさもさう事

神部社頭

[illegible]の黒[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]の水
[illegible]池乃菖

[illegible]度[illegible]杭[illegible]板[illegible]の面
[illegible]の[illegible]段象水
[illegible]の書[illegible]大根[illegible]
[illegible]
[illegible]に似て[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]に[illegible]水の事

十月十二日江戸ゟ
ひたちへ越日
[illegible]袖て色抜き[illegible]の
[illegible]しい草も似[illegible]花
[illegible]の苦もあ花咲中
人[illegible]埋[illegible]炭[illegible]
雪ふ[illegible]暖[illegible]
[illegible]手桶を抱く

[illegible]を[illegible]て佐[illegible]の魂
[illegible]の家[illegible]石[illegible]の
[illegible]の抜ヶ人に[illegible]人乃[illegible]
[illegible]の[illegible]面[illegible]
小[illegible]を[illegible]
[illegible]の[illegible]や鶏[illegible]
[illegible]天[illegible]
[illegible]

たりてくるしとは蓮葉の
さめ果てしものや蟲のあとの
夢
米粉人参に四五人
雑炭
老にたりと思ひ代なれども根岸の西
俳かく貧人にしとあれば代を
俳を見て庵のひとりぬれ枕を
さあくても蓮葉うれを見巨燈

主母方朝の夢つの
かくを望にうれし
夢つれし雀に鶯の口もこの事
りとしや向を小家の寒牧

文政七年二月

[illegible]の蹄の世[illegible]ま　嵐雨

萬[illegible]年　歳世[illegible]子　草丸

花の[illegible]の[illegible]乃酢のき[illegible]初[illegible]

組月[illegible]の強減りまゐ　雨

五月の東[illegible]　たけ[illegible]乃

城[illegible]茶を小筏に積　丸

繪唐人彼等の入を見て居る
ところへ四五人の喧嘩追従
二階へ持ち上げて来る古道具
等の高値を言ふ暗闇
時間後彼等を待ち受
言ふ迄の多額の里
精進の毛を抜き
忘れて後に益人の来る
名たる紀度こゝに紀名古屋に
侍不の出入のけふ行式
樵木屋の樵夫これい樵の咲
水の国くり傳の館
借貸と渉しこ代る事者
あれこゝ初恵の神
いつ多の事に多蚯蚓等
住んこゝ百度埋火

葬礼の會葬に会ふし　丸
日しを為に股をとる　永
追剥の住くるる桜原　丸
誰か続こうの危の明く　永
朝夕の後場物は赤く　紫淡　丸
月のくくるる四月二日　永
芥子の花袋の形に充つる　丸
春さも春しまて春色　永

名の売れる病を大切　丸
糸の葬の樽古くする　永
うるれ枝子果報の点ふれや　丸
去りつつ牡丹芽をもつ　永
恋ふ人永へ解れる高麗ぬき　丸
清水にめ川雑子の宮　永

杜鵑一年

美しき花盛のときに不来の山　まゆち

雲のうへめの山青雲　寿み

つゆ乃香の茶白乃鉢の白乃　九

内て春留　春乃犬の子　み

新乃月　鶯の埃り消くに　九

堀くまり　人ちけてやる　み

春衣のつまの留役につき

自然茶に春留　端乃　九

きくまつの加くに春年のれ　み

夜明くまい暴れ物し

原八の庵を つる留宿久千　み

杭を田に　ちの湾　九

五日くまる日乃　み

八川まて　秋いちまき寺と　九

学とれい屋根て　呼しきまくす　み

入るさすが所役の跡 丸
こゝ又龍に持たる湯泉つゝ 永
ゑうんの名に理りの 丸
寮の四三焼は仕舞ひ一生を
弱の兄の小立面を婚宜 永
玉生の里の朝茶のおち時 丸
まひまの和のたち多辻佛 丸

花とさて眉をかつをと 永
黄泉の人のちつち蔕生て 丸
八卦の光まきの未 永
地の人貝の什実さつをと 丸
蔕もつくすに 蚤の朝 永
之待八秋のちゝ脾のきル 丸
ちつをハ兵山雀 永
井戸つけて社祭ハ番を譲 丸

酒あらためて春ぞ四三年　秋

菜のやすさ切干もなほ京　九

鳥の花のこい早起の夏　秋

川波のせくつく言ふい花ぞ春　九

寄蜂枝のあるを土筆えらく　秋

猫が恋ふる月を合ふく眠りけり

苔敷けば海の近くに碁を囲む　岩間

鳩ぬきさしの長寿を和

神の子に風をふつて吹くよりも

雲を抽の作久言ふ

杉苔の雪解のる土筆の

同ふるふるものあ

鶯を筆七花を

切れ中の二年を掛

玉筆やすれば桔木の

花甲庵
不苟將